

## ロジカル・シンキングの極意（2）

### 裏返して why 型質問に変えてみる

What 型質問で考え方の土台を厳密に規定することができれば、次はいよいよ why 型質問の出番です。一見、難しそうに感じられるかも知れませんが、恐れる必要はまったくありません。実は、ちょっとした工夫を凝らすだけで、あらゆる問いは、すぐに why 型質問に衣替えできてしまいます。

前回例示した「どうしたら我が社にうまく成果主義を導入できるだろうか」という問いも、ちょっとした工夫をするだけで、why 型質問に修正できます。その問いを裏返せばいいのです。つまり、「我が社ではなぜ成果主義を導入できていないのだろうか？」というように、現状の原因や理由を問う形の質問にすればいいのです。

### 裏返しのコツ

ここで why 型質問を作成する際のコツは、how to 型質問を裏返すというテクニックです。「どうやって成果主義を我が社に導入できるか」という問いの奥には、我が社では実際に成果主義のシステムが導入できていないという現実が潜んでいます。こうした、理想を実現できていない現状に対して「それができていないのは、なぜ？」という形でメスを入れてやるのがここでいう「裏返し」のテクニックです。

### 因果関係をつかもうとする努力が重要

「なぜ？」を問う本質は、その事象の理由や原因を明らかにすることにあります。つまり、why 型質問に衣替えすることで、因果関係の明確化へ向けて自分なりにいろいろと考えるきっかけを作ることができるのです。もちろん、現実はいろいろな要因が複雑に絡み合っていて構成されていますから、正確な因果関係をつかむことはできないことの方がむしろ多いのですが、why を尋ねることで、how to 型質問で尋ねているときよりも物事の本質がよく見抜けるようになっていきます。

これでひとまず why 型質問は完成です。次のステップはこの質問に対する解答を自分で考えていくことです。

### さまざまな可能性を考えてみる

Why 型質問に対する自分なりの解答を考える際に重要なポイントは、いくつもの可能性を列挙してみることです。現実の状況は、実に多様な要因が複層的に絡み合っていて構成されていますので、たった1つの可能性を考えるだけでは不十分です。

現実的可能性が殆どないようなストーリーであっても、ロジックとして考えられる限り、とりあえずは排除せずに列挙しておくという姿勢が重要です。不要なものはあとから削除

したり、整理したりすればよいわけですから、まずはできる限り多くの可能性を考え、いろいろと挙げておくことが得策です。

### いったん自分を離れて見つめ直してみる

さまざまな可能性を考えるに当たり、自分はこうだと考えるけれども、上司の A さんならこう言うだろうとか、同僚の B さんならああ考えるだろうとか、こういった、いわば“他者のロジック”についても考えておかなければなりません。自分の立場をいったん離れて、他者の立場に立ちながら思いを馳せると、より客観的・相対的に、冷めた眼で、現実を見つめることができます。そして、冷静に考えてみると他者の考えるロジックの方が正しかったと思えることも、実は多いのです。

普段から周りを見る余裕がなかったり、視野が狭くなりがちだったりする人の場合には、この「他者の立場に立って考え直す」という作業は意外に難しいものです。

### 整理のテクニック

いろいろな可能性を考えながら要因を挙げ、ストーリーを複数考えることができれば、次の作業はそれらを整理することです。この種々雑多な要因の整理に力を発揮するテクニックが、いわゆる「MECE」（ミースまたはミッシー）と呼ばれる考え方です。

MECE とは、“Mutually Exclusive, Collectively Exhaustive”の頭文字をとった呼び方で、直訳すると「相互に排他的で、かつ全体として尽くされている」こと、すなわち「漏れなく、ダブリなく」要素を挙げて整理すべし、という考え方です。

この MECE は、欧米のロジカル・シンキングのテキストブックには必ず出てくる、基本中の基本の考え方の 1 つです。

株式会社インソース <http://www.insource.co.jp/>

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-19-1 神田橋パークビル 5 階

TEL : 03-5259-0070 FAX : 03-5259-0075